



長谷川 一

(昭和22年5月1日就任)
東浪見村議長



田中 広俊

(昭和26年5月7日就任)
東浪見村議長



長谷川 等

(昭和31年11月3日就任)
一宮町議長



渡辺 武司

(昭和33年11月3日就任)
一宮町議長

感謝の誠

久我 掬太郎

昭和二十八年は地方自治法の改正により、全国的に市町村の合併が行なわれ、不肖合併初代の町長の職を汚した関係で、編集室より一言なにか述べよとの御命令に接し、合併当時の模様を少しく申し上げることに致しました。

旧一宮町は、人口の少ない事情から隣村東浪見村と合併する事になり、新一宮町が誕生したわけですが、当時同じ隣村の長生村の一部(新地、船頭給、宮原)が分村合併に難行して居り、長生村内で賛否両論騒がれ続けられ、分村側の家庭では義務教育中の子供達を登校させず、寺院や神社村へ集合させ、昔の寺小屋式の教育を続け、当一宮町に対しては、不買同盟の幟を押立てて商人を脅かし、村当局との間にも血の雨を降らす争いで、入院患者が相次ぐ始末でした。私は、合併時の町長は合併前の両町村長談合の上、いずれか一人町長として残留し新町政に望むことが理想でさり願望であったのですが、前申し上げたような紛争が続く限り左様簡単には参らず、周囲の状況から私自身進んで町長に就任せざるを得ないことと相成った次第です。幸い着任後町民各位の御協力と長生村当局の御理解により、分村合併も落着し、長生村は平和な村に戻りましたので、先

先安堵、共に手を取り笑って交際出来るようになりました。

扱て、合併が成立致しますと、何処の町村も同様早速要求されるものは、施設の新築であります。即ち義務教育校舎の造営、役場庁舎の模様替え、保育園の増設等、次々と仕事が湧いて参りました。併し財源不足で悩みました本町は、先輩の御努力による町有財産が若干ありましたが、これは町の非常災害に備える必要もあり、町の信用上手離す事が出来ません。そこで、町起債、補助、当時の貧弱な税収入の一部などでどうやら切り抜いて参りました。そして充分ではないが、徐々に新町行政が軌道に乗って参ったのです。

次に就任三年目を迎えましたので、延々になって居る社会福祉、観光の面に力を注ぎたいと決意し、手初めに海岸に養老施設を計画致しました。しかし、目的の土地、家屋の面に不都合が生じたため、実現の運びに至らなかつたのはまことに残念でした。続いて小学校裏山を小公園化致そうと考え、まず加納久宜公の墓を整備し、参道の修覆を終り、墓所周辺に九州の後藤文夫さん宅より寄贈の多種類の躑躅を桜山に植樹致し、やや形が整って参りましたが、乍遺憾健康を害し辞任せざるを得ない状態になったのです。

任期を残して退職するのは、町民に対して本当に申訳ないことに存じております。他に玉前神社裏の霊地を区民の勤労奉仕で開墾して遊園地をつくったり、東浪見地区の二級国道を完成させたり、林道を新設したり、数々の思い出が御座います。しかし、後任の町長さんはよく議会の協力を得て、時代に則した行政推進により徐々に町を発展させておりますが、私もそのさまを見て感謝申し上げます居

る次第で御座います。

(元一宮町長)

町の今と昔

大場 英二

埼玉に育った私が、いつ一宮町を知ったのだろうかと記憶をたどってみると、明治の終りの頃のこと、当時東京博文館発行の雑誌太陽に、一宮藩の加納久宣さんが、日本十傑の一人として、その伝記が載っていたのを見たところからである。

子供心に加納さんは、子爵でありまた政府の要職にもある、偉い人であると思っていた。その後、郷土一宮町のために、町長に就任されたことを聞いたが、当時華族で町村長になったのはほとんど稀であって、そのころから加納さんは民主的な政治家であったように思う。

ところがはからずも、大正十二年に、この町で私は、土建業を始めたのである。この頃は加納さんは故人となられて、拝顔の機会がなかったのはまことに遺憾であった。

思うに、この町は古くから、湘南地方にも勝る、自然美と、温和な気候とによって世に知られ、殊に町並は広く、また耕地はよく整理されている。これを見た時に、かつての模範町村であった面影がよく偲ばれる。しかし、城下町の特殊性とでもいうのか、いかにも

消極的で発展性に乏しい様な気がする。これはまた一面大きな原因があると思う。それは地形的に、あまり恵まれていないからでもあろう？すなわち一面に開けた豊かな農地、これを隔てて漁場としての海、ゆるやかに町を横切る一宮川、これに加えて背には豊富な山林をも抑えている。これらがそれぞれの幸を持っているので、これによって町民は、日常の生活には不自由は感じない、こういったことが町の状態の内によくうかがわれる。

ところが、昭和十一年よりの支那事変に次ぐ、太平洋戦争である。これがため社会情勢に、大きな変革をもたらし、しかも、昭和二十年には敗戦という痛ましい結果を迎え、国民全体は身も心も疲れはてて、いつの日に立ち上がれるかと思うほどであった。

もちろん一宮町も、この苦しみの中にあつたことは申すまでもない。この苦しみの中に推されて、昭和二十三年六月町長に就任したが、もともと野人であつて、町政を見ることは少々勝手が違う。しかも、一宮町は古くより模範町村として全国に、その名を馳せたところ、何としてもこれを恥かしてはならない。

「成せば成る 成さねばならぬ 何事も

成らぬは人の 成さぬなりけり」

こういった気持と自信とをもって、町政に当つてみたものの、終戦直後のことで、まだ戦争の痛手が尾を引いているので、まことに人の気も荒い。まして物資欠乏に加えての食糧難とあつては、町民全体の満足するような、町政はなかなかむづかしい。時々町議会に於ても破乱はみたが、いづれも町を思う気持からで、これも時代の流

れでいたしかたはなかつたと思う。

日本も終戦後十八年を経て、敗戦国から奇蹟的な立ち直りをみて、急激な発展と進歩を示し、不可能が可能となり、夢もまた現実となる科学時代を迎えた。今後一宮町もこれに即応した、町の在りかたでないと思つてゆくとする。

そこで現在町長指導のもとに、全町一丸となつて、観光にまた産業に、その他あらゆる町の開発に邁進されていることは、まことに喜ばしいことである。(元一宮町長)

身体の健康

田中 広 俊

吾々の身体は、吾々の本分を全うすることの出来る身体でなければならぬ。吾々の日々の生活を有意義ならしむる身体でなければならぬ。吾々の幸福を樂しむことの出来る身体でなければならぬ。言い換えれば、健康な身体でなければならぬ。身体の健康は人間幸福の基本条件である。身体が健康であれば、拳動も敏活に、精力も盛んで、精神が常に爽やかである。随つて、学問をしてもその進境が著しく、仕事をしていてもズンズンはかどり、毎日の生活を愉快に且つ有意義にすることが出来る。どんなに遠大な理想でも、またどんなにすぐれた抱負でも、若し身体が弱ければ、これを実現することが

出来ない。まして、生存競争は日に日にその烈しさを加え、吾れ一歩進めば、人は十歩進もうとし、吾れ二十歩進めば、人は三十歩進もうとし、たとい、最初は身体の強健な者であつても、漸次疲労を來たし、甚しきに至つては終に病氣となることは、決して稀れでないのである。

それ故、身体の健康を保つことは、自分に対する道徳の最初のものであるといわねばならぬ。彼のローマの詩人が健全なる精神は健全なる身体に宿るといったのは、一寸見ると平凡のことのようであるが、よく考えてみれば、その意味はいかにも深長である。吾々の修養は先ず身体の健康を養うことから始めなければならぬ。

自分の身体の健康は、単に自分一人の幸福であるばかりでなく、家族の幸福である。家族に一人でも病弱な者があれば、一家全体の不快、苦痛の源となるであらう。否一人の健康は国家、社会の幸福である。人若し不摂生のために病氣にかかり、自主自営の生活をなすことが出来なければ、家族なり他人なりのわずらいとなるのは勿論、また不生産的人物として、永く国家、社会のわずらいとなるに相違ない。吾々はこの世に生きている限り、自分の労作の結果に依頼するのでなければ、必ず、他人の労作のそれに依頼する外はない。随つて、一人の遊民があれば、それだけ国家、社会は損害を被る訳である。それ故、身体の健康を保つことは、ただ自分に対する道徳であるばかりでなく、また国家、社会に対する道徳である。

大自然は平等を好まぬであらうか。世には生れながら強健な者があり、虚弱な者があり、或はまた不具、癡疾の者がある。この事実

については、吾々人間の力はこれを如何ともすることが出来ない。けれども、生れた後の健康に至っては、或る程度までは人力を以てこれを左右することが出来る。世には自分の不注意、不謹慎のために、自ら自分の健康を害する者があり、これに反して、周到なる注意の下に、生れつき多病なるにもかかわらず、能く天命を全うする者がある。そこで健康に関する道徳が生れて来る。この道徳を無視する者の如きは、健康の価値を知らないものといふべきである。つまり、好んで自分が人間たる資格をなげうつ者である。

健康を増進するためには、吾々は種々の事柄に注意しなければならぬ。衣食住はその主なものといえよう。

今回旧東浪見村、一宮町、合併十周年記念事業として、町史編纂するに当り、随筆の寄稿を許され、無上の光栄に存じて拙稿を提出することにした。何等かの参考になれば幸と申す次第である。

(元東浪見村議会議長)

思い出の記

長谷川貞雄

終戦後に於ける民心の弛緩は言語に絶する。前途には何の希望も光明も持てなかった。唯住民はその日その日をどんな仕方でもどんな風に過して行くかに思案するだけが関の山の程度で、それは百姓は

百姓なりに、商家は商家なりに、その様相は千態万様ではあるが、ここにその当時の思い出を随想的に綴ってみよう。

食糧の割当と供出

食糧はさなぎだに不足するにもかかわらず供出のため更に大きな制約を受けざるを得なかった。割当は国から県へ、県から郡へ、郡から市町村へという風に末端まで下した。郡から各町村への割当方法は一言にして言えば一町村から二名宛の代表が委員として送り込まれ、これ等のものが地方事務所に参集協議して各町村別に数量をきめたものである。其の方途は県から下りた総数量に対して町村別に地力等を勘案考慮して決定したものを各町村に示した。これがそのまま町村の供出数量と認めねばならなかった。不均衡だということで数量の修正方を陳情した町村も可成あったが必ずしも許容されなかった。一旦きまったものを訂正すればそのひびきが大きいのであるから。こんな風で一度割当られた数量を変更する事は極めて至難なわけで、町村では調整委員会の決議によって地力等級別の総和を各人へ割合をした。当時東浪見村の割当は反当平均二石二斗位で、一等地をもっているものは反当三石四斗位を背負わなければならなかった。肥料の配給など極めて微々たるもので、中には無肥料同然であったものもある。それは上田には施肥することをひかえ下田に之をまわすという仕方であるから反収は上田で五俵か五俵半位、下田では四俵か四俵半位、おまけに一年すぎ位に秋の台風に見舞わ

れたので不作の年が多かった。上田と下田をほどよくもっているものは出産的供出は楽であったが、上田を多くもっているものほど供出に苦勞した。保有米を割いてまで供出せねばならないものが相当人数あったのである。こんな風に同じ農家であっても耕地の持ちまわりによって随分不公平、不均衡であったので、この点を是正するために各町村に地力調査委員会などを設けて地力の等級調整をはかったが、最終的には大した実効を取ることが出来なかった。

町村吏員

当時は食糧を生産することが喫緊の要務であったので、一旦吏員に欠員が出来ると直に之を補充することは困難であった。二ヵ月も三ヵ月も他の吏員が事務を代行し、其の間理事者は懸命に物色に努めたものであるがなかなかはがしく進まない。漸くのことでは採用はしてみたが長つづきするものは減多になかった。それは給与の面が低いということと田畑を自ら耕して米麦の増産をはかる方が採用上はるかに増したという観点に起因したのであろうか。そこで理事者は起用の視点をかえて神職とか僧侶の方へ眼を向けて之に呼びかけた。この方は比較的スムーズにはこび且つ長つづきもし、今になって想起すれば頗る効果的であったように感ぜられる。

農地改革

農地改革によって多くの小作農が自作農にうつり変わったことは誠に結構である。それは自らの手で耕すことが出来たので農民に希望

と光明を与えたので一層奮起するようになったからである。この反面旧地主の中には大きな衝激を受けて再起することの出来ないものもある。時の政府はもう少し事前に於て綿密周到な立案計画をして実施に踏み切るべきであったろう。今日になって考察するにあまり事を急ぎすぎた感がないわけではない。大化の改新以来の一大変革であつたらうに、今後の為政者に対して望むことは其の善後措置はどうあるべきか。

学校教育とPTAの誕生

小中学校の教員の中には県会議員とか国会議員の選挙のある度毎に幹部級のものトラックに乗って候補者の氏名の連呼をしたり、旗を振って声援をしたものがあつた。

これ等の教員は授業を放てきして猛烈に運動をしたので奏効の率は極めて高かった。一面指導をし監督する立場にあるものは唯手をこまねいて見て見ぬ振り、聞いて聞かぬふりする位で手段のつくしようななかった。地方の有識者は一斉に青少年育成の前途を憂えて止まなかった。偶々PTAがうまれたので、この点にはかなり批判的であり、他方教員も又自爾自戒して正常に復し教育に専念するようになった。

砂鉄経営

位置、工場は釣ヶ崎祭典場より少し下った海岸が中心で、その周辺で事業が行なわれた。鉱区としては太東下から南川尻に至る海岸

白砂地一帯

建物、工場三カ所、倉庫三棟、事務所一棟住宅一棟外付属舎

県への払下金納入

幾多の迂余曲折を経て昭和二十三年一月漸く払下げの段階になった。総額六十三万円余、当村にはこれだけの余裕がないので一時借入して納入せねばならなかった。出資することに同調したものは理事者をはじめ村議会議員、村有志の方十五名くらいであった。一般会計より分離し特別会計とした。

操業

事業主任を秋場孝、人夫監督を吉野徳次郎に委嘱。両氏ともこの仕事に専念され事業も順調にすすんだ。人夫は県営当時のものを引き続き使用、採用したものはどんな風に処理したかといえ、主として新潟県長岡製鉄所へ他は富山県永見製鉄所へ太東駅を経て貨車積みで送った。ところが当時は貨車まわりが極めてわるいので駅構内に砂鉄の大山が出来、他からいろいろな苦情さえ出て困った。貨車まわりのよくなかったという事は貨車が戦災で少なくなったという他に食糧輸送が第一義で砂鉄のようなものは第二、第三の順位で第一義が充足されて余裕が生じた時に順番がまわって来るという状況であったのである。新潟からの送金は契約通りいつもスムーズに行かない場合もあった。人夫賃は勿論其の他の諸雑費も支払わねばならない。この分について便宜上他から一時借入れて間に合わせた

ことは一再にして止まらない。また長岡まで出張して督促に力めたこともあったほどである。

こんな風に経営し苦勞の面もあったが人夫の生活も安定するし、採算もとれ村財政には、多少寄与することが出来たのであるが昭和二十四年中学校建設上財源を生み出すことに深く苦慮し、已むなく之を他へ移譲せねばならないようになった。損のない採算のとれる事業である故に各方面からかなり払下げの申請もあったが県から払下げをする条件を顧慮して村営に最も近い線という観点から農協へ移譲した。一切の施設と滞貨分を合わせて五十八万円位であった。

公務出張

学校建設に伴う起債とか補助に関する諸問題や砂鉄施設等払下問題で屢々出京出県した。交通機関は今のようではなく汽車の如きは二時間おき、乗客はいつも満員、立錐の余地もないと言って過言ではない。乗り降りにかなり時間もかかり屈強な人であっても容易ではなかった、窓から乗ったり降りたりすることは平気で行なわれ、駅員であっても之を制止するどころか乗客の尻を押してやったくらいである。特に東京都内で交通機関と言えば市電車で諸官庁を訪問陳情したので往復に余分な時間がかかるし機動性もなく随分不自由であった。自動車など数えるほどしかなく、従って之を利用することも出来なかった。出張先には今のように休憩して茶を飲むところもない始末で出張の都度弁当をぶら下げて行ったものである。今はもう過去の語り草に過ぎない。

民心の動向

一村一郡内でも戦前派と称するものと戦後派とよばれるものとの争が随所に生起してなかなか論議はつきない時もあった。戦前派の多くは全く虚脱状態でなら希望的情熱的なものもっていなかった。戦後派の人々は新しい感覚に立って物を感じたり、見たり、そして行動するので常に世の中の先頭に立ち優位を占めた。だんだん世の中が落ちつき双方の考え方も歩みより、争点もかなりうすらいで戦前派と雖も漸く復活するようになり共に手を携えて村造りに協力する気運になって来たことは欣快にたえない。

むすび

戦後十八年国民の経済生活はいやが上にも高められて来たが治安の乱れて来たことには痛恨に堪えない。歴代政府は国民経済の伸長を施策の根本と考えて、それを生み出すべき人間完成の基調についてはあまり意を用いるところがない。試験場とか研修所や校舎を建設することは為政者の責任であろうが、それが直に人間完成になるのではない。最近になって漸く人造りを呼ぶようになり青少年健全育成を唱えるものが出て来た。そもそも青少年問題協議会なるものは戦後間もなく吉田内閣によって法文化され各都道府県では県主催で幾つかのブロックに別けて協議したものであるが、末端の指導督励の段になると特筆すべきこともないので実効を取めることは出来なかった。今になって末端指導の必要性を痛感したのであろう漸く青

少年健全育成というテーマを設けて、再出発したようであるが、おそかりしのうらみがないでもない。之が徹底を図ることは容易なわざではない、指導の任に当るものは、須く単なる申合や協議にとどまる事なしに、率先垂範、陣頭指揮をする位の気がまえをもって推進して貰い度い。しからばどんな人間を作るかという具体性になると語らんとするものは極めて稀である。政党内閣であっても文相の立場は中立的の人を選任すべきであろう。例の旧内務官僚の如きでは真の教育を解せまい。教育の中立性を堅持する立場から考えても背骨のしっかりした人を文相の位置に据え透徹した理念理論に立って真の日本人らしい日本人の完成に努めさせて欲しい。斯くすることによって青少年は希望をもち、実質剛健進取に富み民族はあげて興隆し世界の平和、民族の福祉に寄与することが出来よう。

(元東浪見村長)

郷土誌の位置／今井福治郎

私が上総一の宮を屢々訪ねるようになったのは終戦後である。何回となく訪ねているが、このように繁く訪ねるようになったきっかけは、玉前神社である。房総萬葉地理研究のやり直しを始めた頃である。終戦前の研究は、一地点だけの追求に急であった。しかし、一地点の古代的要素を明らかにするために、その母胎に眼を注ぐことの必要であることを覚え、それ以来同地を訪ねるようになったのである。九十九里浜を底辺とした飯岡の玉崎神社と、上総一の宮の玉前神社との究明は、利根川の対岸である波崎町の手児后神社の究明と共に、東海岸の古代的要素を探る上の三大要点である。

古代的要素の究明には、文献と実地踏査との必要であることはいうまでもない。いい換えると、文献と実地踏査との交叉点に、古代的要素の鮮明があるといってもよい。文献には先人の残した資料、殊に郷土に生まれ、郷土に育った人の著書の恩恵は甚大である。郷土誌の存在が、大きく認められる所以である。

終戦後十八年、人の心も慚く落ち着きを得て、自分達の郷土を振り返る余裕が出たのであろうか。最近の郷土研究は、全国的に著しく活発である。郷土誌の古書類も、暴騰を続けている。郷土誌によつては、既に入手し難いものもある。私はかつて中村正紀氏に、一宮町誌の有無をお尋ねしたことがあった。これだけの町に、既に町誌が有ると思っていたからである。しかし、まだ発刊されていないことをお聞きし、残念千万に思ったことがあった。だが、そのことも消失した。この度の町誌の誕生は全く目出度い。学問の上に如何に郷土誌が大切であるかを、痛切に感じている私にとっては、何としても嬉しい。早く拝見して、私が永い間興味を持っている鶴羽神社と玉前神社とについて、考えを纏めたいと思う。それにしても、町誌発刊にまでことを運ばれた方々の御努力が、身に沁みることである。(千葉県文化財専門委員、文学博士)



思 い 出／志田一郎

私が始めて一の宮に行ったのは、明治三十八年八月の事であった。当時、東京小石川原町の家には私は、父に連れられて本郷三丁目迄人力車でゆき、本郷から本所迄市電、それから徒歩で両国駅へ、そして総武線で千葉迄ゆき、房総鉄道に乗かえ一の宮へ着いた。其の間四時間半ほどかかった。汽車は小さな箱で一等と二等が半分に区切られていた。私共は二等へ乗った。其の頃一等は白、二等は青、三等は赤い切符であった。夜はランプがついていて、冬は一等と二等にだけ足温器が入っていた。大きな懐炉のようなものであった。一等と二等はビロードのクッションにスプリングも入っていたが、三等車の腰掛けは畳表のものもあった。



一の宮駅に下車すると一宮橋のたもと迄歩いて、そこから川舟に乗った。川舟は小さいものは二間位のものから大きいものは、四間位で屋根舟もあった。棹で漕ぐので大きい屋根舟等は船頭が二人で漕いでいた。川の両岸には葦がはえていて、その中でヨシキリが鳴いていた。水際には大きな赤いはさみのカニもいた。海岸に木島橋というのがあって橋銭をとっていたが、五厘か一銭であったように覚えている。南の一松側つまり左岸の橋のたもとに木島という家があって半営業的に海水浴客を泊めていたが、その離れに私は父と共に宿をとったのである。食事は宿の女中さんが三度三度運んで呉れた。父は当時売出しの帝大教授で、若い法学博士であったから相当もてたものらしい。船頭給というあたりには二、三別荘があった。その一つに税所さんという鹿児島出身の軍人さんが住んでいた。なお、その辺に海江田さん達の町田さん達というこれもやはり鹿児島出身の方々の家があった。父はその海江田さんの幸吉さんという御子爵をついで、大正天皇時代に大膳頭等をやったりした侍従の方の家庭教師のようなことをしたことがあって、その関係で御親類の東郷大将とも親しくしていたようである。その頃、一の宮海岸は漸く東京に知られた海水浴場として相当数の避暑客も集まっていた。旅館は青松館という

のが左岸に、右岸には一宮館があったが、一般農家でも部屋賃をするのが流行して、離れのある家等は勿論おもしろいにも部屋が多い家は避暑客に貸していたようである。その避暑客の間に海水浴は勿論だが、彼等はよく花火遊びやまたは集まりがあって、トランプや、ラカン廻し、コックリさん等やっていた。一夏に二度位は和船の競漕もあった。一人乗の和船の船には、赤緑の旗をたてた三隻が裸の青年によって棹で競漕されるのである。大抵、鉄橋下あたりから木島橋まで別荘の女性達が応援に出て大騒ぎであった。私の父は大学時代、ボートの選手だったので、たのまれてその審判をしたりした。勝者には、別荘の令嬢達から賞品が贈られ当日のチャンピオンには、彼女等が手製の野草の花で作られた花輪が贈られたりした。それを首にかけて大勢の裸坊が美しい女性達と一緒に撮った写真がこのあいだまで家にあったが、私も父も写っている。その頃の女性の海水着はずい分大時代物でなんと今の看護婦さん達が着ているような白衣であった。今の半裸のような姿等見られそうにもなかった。それから昼間の遊びとしては、川の浅いところでシジミをとることである。このシジミは、献上シジミといって旧幕時代藩主の加納家から、時の幕府の將軍に献上したものだそう大きいものもあり中には、黄色のものもあった。又川岸の葦の繁みに柳等の生えている淵があった。そこには大きな鯉がいて漁師が堅網でその鯉のいそうな辺りを囲んでその中に入り、竹のつき棒でやたらに突いて出て来る鯉を手づかみにし、これを見物する屋根船の家に呈すると、船ではこれを直ぐに料理して客膳に供する。例えば生きづくりとか天ブラとかにして賞味した。これは鯉巻きといって一宮川の名物だったが今もあるであろうか。なお海では地曳網があって、鰯や鰯が沢山とれた。カニ等もとれたが、時にはフグやクラゲばかりのこともあった。海水浴の人々が地曳網を手伝うととれた魚をわけてくれたものだ。それから今は全然なくなったが、盆貝という大きな貝がとれてこれは丁度潮吹きの大きなものに似ていて、多肉で、やわらかく、へりが桃色でつけ焼等にするとたいへん美味だった。九月十三日は、玉前様のお祭りでも末社十二社の神輿を従えて太東岬までの浪打ち際を裸の氏子達にかつがれて大宮若宮の二つの神輿の渡御も大した見物であった。お盆には方々でひなびた唄声に合わせて野趣満々なお盆踊りの行事もあったが、後禁じられたので私の父は、これを惜しがり邸の庭でカガリ火をたいてよく古老達に踊ってもらって皆が見物したのを覚えている。秋は茸狩り、春さきになるとドジョウ打ち、これは松のヒデを燃してその明りで竹の先に、はりを植えた道具で田のドジョウをとるのである。真暗な夜景にその明りが点々として一種の趣きがあった。一の宮の名物土産として

ては、カマスの干物に梨等だが、角八のまんじゅう等も有名であった。後になって、角八では私の父や栗津清亮氏の肝入りで九十九里せんべいという高級なせんべいを造った。これは有名な梶田半古画伯の一宮八景を焼絵にして安積良齊の詩を入れ裏は地曳網をきかした網模様であったと覚えている。父はそんな事が大好きであった。一頃は海岸でとれるキシヤゴのみ、つまりナガラミの罐詰を作らしたり山桃のジャムを作らしたりしたものであったが、今はもうそんなものも見当たらない。

名所としては太東岬、東浪見の軍茶利様、行基の開いたという観明寺、国弊中社の玉前神社、加納氏の先代が力を入れたボラのセキ、洞庭湖の桜等がある。

一頃、上総一宮は湘南の大磯に比肩する位有名になって有名人の別荘が百以上もあった。私の覚えているだけでも齊藤首相、平沼首相、上原元師、秋田議長や三井八郎、二郎氏、清水一雄氏、加納子爵、伊達伯爵、山田侯爵、南部伯爵、中村進午博士、栗津清亮博士、梶田半古画伯、国沢新兵衛氏等々相当の人々がおったが、戦後これが皆さびれてしまった。従一位子爵の加納久宣氏が町長時代もあって、一時は一宮も盛んな時代があった。今でも一宮学園や千葉県林業指導所等見るべきものもあるにはあるが、なお一層今後の発展を期すべきである。

明治四十二年の夏、東郷大将が一宮へ来られたことがあった。当日大将はグレーの背広にハンティングという英国型の紳士姿で駅に降り立られると、出迎えた父に会釈をして人力車に乗られた。その人力車というのは、父が東京で使っていたもので金属製のゴム輪で、後に小さな笹りんどうの家の紋がついていた。当時では、今最新流行のトヨベッククラス位である。沿道を埋めた人々は海軍大将の正装を予想していたらしく、中には東郷大将ではないといった者もいたとか聞いた。私が京華中学一年の時で弟の三郎は七才で富士見の幼稚園に通っていた。大将は老女子の裏門から入られて出迎えた母方の祖父や母に挨拶された後、私と三郎の頭をなでられ、「坊は大きくなったら何になるか」とたずねられた。私は直ぐに「学者になります」と、答えたものだ。父が大学教授だったからであろう。すると弟の三郎は「僕は東郷大将になります」とやった。大将は「ああそうか、よい子だ」と大層御機嫌であったが当時大将の人気というものは大変なもので幼い者まで理想にしていたものだった。

それから新築の離れで入浴され二階で中食をとられ、酒を召上つたが、興至ったものか、父が差出した芳名録の二頁に亘って海岸の松林らしきものと沖に浮かぶ帆掛船らしきものを描き、空白に「大海を航する宝船巴酉

夏平八郎書」と書かれた(写真集参照)。東郷大将の字はずいぶん見るが絵は見たことがない。おそらく唯一のものではないかという説がある。それで私は志田家の宝と思って近い内に芳名録を修復し、どこか博物館にでも寄贈しようと思っている。この芳名録にはその頃父のもとを訪ねた方々の署名や文字や絵があって相当有名な方々のものものっている。主として父の友人関係が多いが、私の知っている人だけでも、夏目金之助、岩野泡鳴、美濃部達吉、中村進午、岡田朝太郎、立作太郎、小野塚喜平治、山田三郎、梶田半吉、畑仙齡、日比野寛、海江田幸吉、関一、穂積陳重、川名兼四郎、今村明恒、小汀利得といった面々で、何れも当時一流の人物である。一の宮にまつわる憶出はそれからそれへと数限りもないが、私の九才の時から六十八才の今日まで丁度六十年の間にあった様々の記憶をたどりながら、これを書いていると世の中の変化の著しいのに驚く。日本の人口も四千万足らずで、東京の人口も二百万に足らなかった。飛行機はまだなく自動車は明治屋の一号を東京で始めて見たものであった。

明治三十九年の暮に老女子に別荘が出来て父母は、これに移り住み父も書斎を移してここから東京に通ったが、余程気に入ったものと見えて一の宮に籍を移してしまった。当時の町長が今の中村正紀郵便局長の父君中村祐吉郎氏であったと思う。



一宮川のシジミ取り (昭和初期)

父は老女子にユートピアハッピーバレーを作ろうとして友人粟津清亮氏、中村進午氏、土子金四郎氏、伊吹山徳司氏、藤村義苗氏等と共にその開発に着手した。自邸の山へは銃猟禁止の立札を立てて猟犬を入れてはいけない、小鳥をとってはいけない、枝を折ってはいけない等とやかましくいった。そのため老女子には、小鳥や栗鼠が住み付いて野草の類も数多かったが、亡くなる前にこれを千葉県に寄附して、今は千葉県立の林業技術指導所になっている。

父は八十四才、母は八十八才でここで他界した。遺言によって邸内に埋葬した。墓所は父が生前にきめて置いた所で、自らつつじが岡と称し大神宮が祭つてある。

また中門の左にある山茶黄の木は父方の祖父が徳川一橋公の御上洛にお供をして無事だったのを賞せられ、何なりととらすとの御意に承えて邸前の木を所望したものである。徳川家のお菜園小石川の植物園にあるものと同世代のものというから数百年になる筈である。その外この邸は、一宮と東浪見にまたがっている。父はこれを一東園と称し、また寺尾博士は向日山荘と名づけられた。母が手植のバラが六十年も経っているので、私はこれを長寿園と名づけ、父がよく杖を引き読書をした山頂の四阿は観潮亭という。昔、漁師が潮見をした所と伝えられる。老女子という名も太古玉依姫の乳母が住まれた所と伝えられている。近くに宝谷等という所もあって、父はよく古墳でもあるのではないかといっていた。私は子供もないので、この土地を私の作った千葉カントリ倶楽部の従業員の共済会に寄附して、海の家にするつもりでいる。父はよく人間は裸で生まれてきたのだから、裸で死ねばよいので子孫に財を残すのはよろしくない、といっていた。そして無理想を実行して死んで行った。私も父の訓に従って、私財は我々夫妻なきあとに、これを悉く前述の共済会に遺贈するつもりで遺言も書いてある。これで志田家と一宮の関係は永遠のものになると思うと、今、千葉県野田市梅郷の鼓音山荘にあっては、独り日本ゴルフ界のために心を砕いている私にとっても、今更何も思い残す所はないと思う次第である。

一宮の発展を祈る。

一宮の四年間／梶原昌夫



昭和二十五年四月から、二十九年三月まで、満四ヶ年が私に課せられた職の期間でありました。

志田鉦太郎先生が創立され、後に千葉県立一宮実業高等学校となっていた現在の一宮商高、それが県の大方針

による高等学校統合によって独立を喪失し、長生一高と一つになって、その「商業課程・一宮校舎」として新たに発足するに際し、当時県立佐倉高校教頭であった私は、新たに設けられた商業課程主事に任ぜられて着任しました。学校の由緒も、創立以来の大信念も全然知らず、ただ人伝えに聞いたこと——「校舎もガタガタ、志願者も少なく、まるで水船のよう」というのが唯一の既得知識でしたから、遠慮なく言い現わせば「破産会社の精算人」のような役割で派遣されたに似た気持ちで赴任したのです。着任したのは丁度新入生を迎え入れる入学式の朝で、待ちうけておられた後援会長鶴岡彌さんや地元の方々にも着任勿々多数お目にかかる事ができ、その場で早速都合せられた経緯や他の事情を具に伺い、すぐ、独立期成の矢おもてに立つ決心を固めたものです。これは、——適切な表現では無いかも知れませんが、——「朝鮮総督として遣わされたものが、着任と同時に独立運動の旗を担いだしたようなもの」で、甚だ穏やかならぬ仕種であったかも知れません。

この一文は、一宮商高への寄稿ではないので、独立への途を一々書上げることは省略しますが、その日からの三年間は、まったく独立のことで明け暮れたのでした。

先ず何よりも幸だったことは、創立の恩人・初代校長の志田博士を始め、学校のために心血を注がれた鶴岡彌さんその他地域の多くの方々が存在しておったことでした。できる限り機会を作り暇をみつめて、お一人お一人からそれぞれその立場からの観察や批判、また御意見を読みとるように努めました。私の終始変らぬ方針は「個々人にたよらず、熱意と力の結集を頼みとする」ことでしたから、当時は、随分知らぬ間に失礼をしたり、がっかりさせたこともあったことと恐縮しております。

志田先生のお宅へも繁々お伺いしました。学校から、時間をみて参上するので、予め電話でご都合を伺っては、あるものの、玄関で、「今日は会議日ですので午後二時五分にはおいとませねばなりません」などと時間を区切り、その時間ぎりぎりまでお話しして、ひょいと腰を上げて辞去するといった勝手な振舞でしたが、先生はいつも快く御引見下さって数々のお話をお聞かせ下さったので、私は僅か一年という短期間でしたが、先生の御生前の一年間に、おそらく歴代校長の五倍、十倍のお話ができ、また承われたと確信しています。特に心に残るのは、先生はその頃から実施された男女共学にはいろいろお考えになることがあって遺憾の意を表しておられたのを、一回、三回、五回と幾日か連続（時間は前記の通りコマギレで、短時間の日もあれば夜に入ることもある）

りました）お話し申した結果、先生から「よく判った、賛成します、しっかりやって下さい」と激励されたことは、実に忘れ得ぬことです。

私の在任当時から懸案や難問題で、今もなお残存しているものもあることと思います。まったく町当局を始め、多くの方々に非常な骨折をして頂いて、感激の他はありません。郡内へも郡外へも、また千葉へも度々出かけました。その多くの場合、いつも鶴岡彌さんと御一緒のことが専らで（それほど度重なる出歩きにも、鶴岡さんといつはどこで食事した、というような記憶が更に無いことは、この二人とも酒は吞めず、よほどケチな出歩きぶりであったに違いないと今でも折々顧みて苦笑します）たしか志田先生御発病のときも、どこかへ出かけていて急ぎ連立って帰り、お見舞に上ったように記憶しています。

やがて、皆々の祈りも空しく志田先生の御長逝。そして「明治大学葬」を一宮校舎の講堂で行なわれることとなり、次々に開かれる葬儀委員会へ鶴岡さんも私も委員として参画し、できる限り故人の御意志を活かした式とすることができたのは、これまた忘れられぬことです。丁度学校は学級を無理してふやす時運に際会しており、志願者も多く、私共は校内をうめつくさんばかりの多くの花環や葬祭具の中で受験生の答案を整理し、合格会議を開き、発表掲示を書きました。（この時の同僚教職員の多数は今なお健在、半数は現在も引続いて同校に勤務しておられます。従って創立以来の精神は今もありありと学校にのこり、生き生きと現代のかたちをとりつつ生長していることと信じます）御葬儀当日、粗末な、寒風吹き入る建物ながら、ゆかり深い講堂を式場に盛大な式が行なわれ、私も校舎主事として用辞を捧げました。（平素考えていることを述べたので、十何年か経過した今でも、殆んど全文をそらんじていて、今も先生を憶い出す度にその一節をくりかえして、先生をしのんでいます）

私は、教職を奉じて一宮に参ったものですが、主事としての仕事はただ先人の心を心として努力しただけで、別に斯く斯くと誇示することを持たぬのはお恥かし、また申訳ない次第です。むしろ私が一宮に居合せて、その甲斐があったとひそかに思うことは、二大偉人の終焉に侍し、またその御葬送に何らかの心遣を捧げさせて頂くことができたことです。そのお二人は既に述べた志田鉦太郎先生と、トーマス・ペティ先生です。ペティ先生については別項で詳しくそのお人柄や御業績が説かれることですので茲には一々記しませんが、それほどの偉大な方が、あの小さな一宮の高等学校に好意を寄せて下さり、はてはその御縁で主事公舎へもわざわざおいで下さる

程になってきたのは、中村局長のご紹介やら、解説のおかげであろうと思います。偶然、汽車で千葉までご一緒になり、怪しげな英語でいろいろ申し上げたり伺ったりしたことも、今、はっきりと一つ一つ思い出せます。英国人には比較的多数と親しんだ私ですが、英国気質といったものを多少は取り入れて自己の上に活用してみたいと常に思っていたので、そのような機会を捕え得たことは幸いでした。先生がご病氣と承って御見舞に参上した時は、もう重態で何も語られません。その時、先生や、故人となられた令妹が特に心をゆるして語り合われた聖公会横浜教区の野瀬秀敏主教を招くことを考え、中村さんとお打合せして早速それが実現しました。野瀬主教が先生に大声で語りかけ、また祈りをされた時、確かにベティ先生は意識してこれに応じられ、やがてまた昏睡されて臨終の儀式も受けられるようなことに成って行きました。一宮での告別式・東京芝罘町・聖アンデレ教会での外務省葬、いずれも野瀬主教によって執り行なわれ、日本外交の大恩人を送る式は完了しました。まのあたりそれらを望み見て、私は、あるいは自分がこの世にでてきたことは、このお二人に親炙し、またそれぞれの御長逝にお傍近く侍し得たことで、その使命の大半が果されたではなからうかとさえ沈思したほどであります。

故加納久朗氏、故金田鬼一先生、高石真五郎氏を始め著名の方々にも種々御縁ができ、その他非常に多くの方と、一宮在任時代につながれたことは、手許の日記や芳名録を繰るまでもなく、私の在職した県下の八つの高校（短いのは一年、最も長いのは八年でしたが）の他のどこに於ける時代よりも多く、従ってこともまた繁く、いずれも忘れるには惜しいと一々かみしめて、そのご好意を忝く反芻しています。一宮が独立商業高校となり、その反り咲き初代の学校長に任ぜられたことも、光栄のことです。それから市原高等学校へ転じ、昨春現職中最高年齢の故をもって退職、現在は家族と共に茂原市に住み、前任地一宮と格別に濃い地域に日々を過ごすことができるのも、一宮時代ご縁の深かった方々の厚いご好意に基づくもので、感謝のほかはありません。

ここまで書いて、さて読み返して見ますと、区々の記述にとどまり、一宮校舎を中心とした種々の難苦に言及していないことや、あらわすべき多くのお名前を挙げておらぬのを、自分でも気づくのですが、その不備と非礼は再読して頂けばおのずからご諒恕ねがえるものと思っています。

元来私は国史学を専攻した者で、着任の当度は未だ放置されてある郷土史資料の数々が気がかりでした。しかし、鹿を逐う狐師山を見ずとやら、目前のことに手一杯で何も為し得ずに過ぎたことは、閑日月の今となっては

頗る遺憾事です。たまたま町史編さんの事業が実を結ぶ頃、上智大学歴史学研究会が、昨年まで何年がかりかで行なった水海道の研究調査を終わり、新たに本年度からまた数年計画で長生・茂原郡市の総合調査研究を開始することになって、先輩吉村茂樹教授や、故白鳥庫吉博士の令孫白鳥芳郎教授を始め教官学生男女多数が今夏から熱心且つ綿密にその業に当り着々と成果を挙げつつあるのを見、このことにも微力を添えることができたことを悦びとしています。白鳥庫吉先生は、茂原市長谷から出られた方で、その故郷たる房総の、長生茂原郡市の歴史・地理・民俗が新たに調査研究され集積されることは、一宮町史・茂原市史が今や刊行せられんとし、また他の町村史も続々編まれて現われようとしている現在、誠に欣懐に存じます。しかも史学に大きな関心と深い含蓄ある友納知事も、千葉県史編さん委員会を管せられる川上総務部長も、この調査研究に絶大な声援を送られたことを当初にみた私は、これと相まって、益々各郷土史が一時の編さん事務で終ることなく子孫に送り伝え、次第にその完璧を期する心でおお今後も活発に改訂修補の方へ進まれることを切に願うものであります。(二二八・一一・二八)

一宮のこと／高石真五郎



私が一宮に居を定めた発端は昭和十九年の春だった。親戚の高藤清次郎さんが一日東京の私の宅を訪ねて、「倉田」さんの隠居所が売物にでているという話をされ、買取ってはどうかと勧められた。家屋、環境など一応の説明を聞いた後、私は即座に承諾した。宅へ帰って妻と伴に話したら余りの即決を責められた。しかし私には一定の方針があった。それは私が当時まで、世間で「別荘」といっているような住居の本拠外にある休息の家を持っていなかったことから、私はそういった家を持って、週末や休暇を得たとき身心の休養をとりたいたいと考えていた。従って一宮は東京に近いし、母の生家のある所でもあるし、環境は申し分ないらしいので、そのほかの条件を考える必要はないと決めたのであった。

妻と伴はその一兩日後、現場を検分に行って帰っての報告は百パーセント、オーケーということで、ここに私の決定はゆるがず、直ぐに手続を取って自分の家屋敷になった。

ところが昭和十九年は大東亜戦争の終期に近いころで、恐れられた「B29」という当時では非常に高性能の飛行機が本土の空襲をはじめたときであったばかりか、前線からのニュースは海陸ともに心を痛めることばかりで、敗戦の色は日に日に濃くなって行った。そしてその年の終り頃には東京、一宮間の交通も安全といえなくなり、年を越えては一宮にさえ悪戯の爆弾が投下されたり、艦砲射撃の脅威があったり、たまに機銃掃射を見舞われたりした。こうして休息の場所を求めたはずの一宮の私の「別宅」は疎開の場所になってしまった。しかし、上記の如く一宮も極めて緩慢な空襲はうけたが、疎開地としては東京附近ではまず安全圏内といってよかった。私はここから毎日新聞社に通勤するのを原則としていたから、東京における危険に会うことはなかった。そして家族は安全であった。一宮に仮住居をなした功徳はこれだけでも、とても有難かった。

だが、運命のいたずらはまだ止まなかった。それは前に書いたように「別宅」のつもりで手に入れた家が疎開の場所になったかと思うと、こんどはこの家が地上に残る私のただ一つの住家になってしまった。というのは、私は長い間大阪と東京の両社を見ていたので、東京、大阪に各独立した家を構えていた。その両住宅とも昭和二十年戦争の終るほとんど直前に空襲にあつて焼失してしまった。それで私はいや応なしに一宮の家に住むことになり、生活の本拠もここに移らざるを得なくなつて一宮町民になった。

それから私はずっと一宮に住んでいたが、終戦と同時に同僚とともに毎日新聞社を退き全く閑散の身となった。ところが、間もなく占領軍政府から追放(パージ)をうけて公的生活にきびしい制約を加えられ、いよいよ閑雲野鶴の日を過ごさなければならなくなった。

しかし、私はこの強制隠遁を苦にしなかったばかりか、そうした気楽な日を環境の美しい一宮で過ごすことのできるのを大きな幸せと思つた。

まだ二十年とたたないが、その頃の一宮川ではハセも釣れたし、イナもたくさんとれた。私は前から釣が好きでヨーロッパにいた頃はいっばしの名人だったので、一宮における川釣は私にとって最大の愉しみだった。釣にかけないときは、必ず自転車で遠乗りをした。ときには十五、六キロ以上も走った。それで一宮附近の町村は

たいがい知ることができた。これは必ずしも運動のためと思つたのではない、むしろ田園風景にひどく魅惑を感ずる私の趣味に駆られたのだ。自転車で乗って、田舎の砂地路をゆうゆうと走りながら、田や畑や木立や農家などが走馬燈のめぐるように眼に写つてくるときの心地は全く静寂と平和そのものだった。

釣と自転車の遠乗りのほかは、当時の物資欠乏から余儀なくされた野菜作りのお手伝いをした。ずいぶんたくさん野菜作りに関する本も読んで、ひとかどのお百姓になったつもりだったが、それは自分免許だけで、培養の少しむずかしい野菜はうまく作れなかった。

しかし、私は一宮におけるこうした日常を幾年かつづけたことが、今日私にすぐれた健康をもたらしたものと、運命のたわむれに感謝している。私はこの九月で満八十五歳になる。日本の習慣に従うと再来年米寿を迎える。けれどもいまのところ私はまだ年寄りのような気がしない。そして体もゴルフを週二、三回やれる程度に動く。海外への飛行旅行も毎年一度または二度やっている。今年は来る十月にI・O・C総会出席のためドイツへ、来年二月にはオーストリアのインスブルクで行なわれる冬期オリンピックを機会にでかける予定である。自慢のようになるが、これは健康の研究に資する参考の一つとして述べたにすぎないのである。

一宮というところは、あけすけにいえは眠っているような町である。それだけに品のいい静かな町である。実は私は町の方々と接触を深めて何か町で「暴れて」みようかと思つたことも度々あったが、何ということもなく実行にふみきる機会をつかみそこなつてしまった。尤も町の方々から働きかけられたことはなかった。近年でも、私は年甲斐もなく、現職について働いているほか、いろいろな会に関係しているため、かなり忙しい思いをしている。それで一宮へ常住ができなくなり、東京に陋居を定めて寄留した、ひとまずなつかしい一宮にさよならを告げたが、心のつながりは切れた気はしない。